神様と奴隷〈恋〉　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　上荒磯　佑哉

さっそくだがワルニナルダで働くにも昇進がある。まぁ別に給料が上がるわけではないのだが。では何か？　答えは、仕事内容。

　カウンターの仕事内容は、主に三つ。まずの命令を全て聞きそれを仲間に伝えるの呪文じみた命令を解読する解析力、次に来るであろう命令を予想し的中させる力を必要とする店の顔『カウンター』。神様のメニュー次第では主役ともなるドリンク、デザートを作る。注文を確認すぐに動く高い反射神経、適切な量の氷やアイスカップに入れる正確性、そして短い時間で効率良く同時に動く並列思考能力を必要とする『ドリンカー』。最後に、カウンター最後の仕事にして、華。前の二つの仕事で必要とされる力にプラスして、美しく品々を袋に詰める芸術力と仲間とのチームワークが必要となる、の品々をトレーもしくは袋に詰める『ランナー』。

　そして今、俺はそのカウンターの華であるランナーをやっている。正直なことを言おう。俺、城門ミナトはカウンターの仕事の中で『ランナー』が一番好きだ。『カウンター』みたいに孤独に神様と対峙し精神をすり減らすことも『ドリンカー』のように孤独に見えない誰かの圧迫感を感じ精神をすり減らす事も無い。そう、唯一『ランナー』は仲間がいる素晴らしい業務なの

「あ、すいません！」

　しまった。肘が女性のスタッフの胸にあたってしまった。俺は、瞬時に顔を見る。怒っては……ないようだな。まぁ、こんなお昼のピークにそんなことを気にしている暇は無いか。俺は、心の中で手を合わせて袋にハンバーガアーを詰める。

「ジョウチャン、それ違うよ」

「あ、すいません！」

　いかん、いかん平常心、平常心。よし、これでオーケーだな。俺は中身をもう一度確認すると

「３６８番の！」

　俺は、商品を手渡した。

　さて、話しを戻して実を言うと『ランナー』という業務はボディータッチが多い。というのも『ランナー』を行なう場所が狭いのだ。会議などで使う長机の三分の一程の広さしか無い台に十代後半～二十代前半の人間が対人距離十数センチ取れるかどうかと言えばその場所がいかに狭いか分るだろう。しかも、そんな狭いところでせわしなく手を動かすのだ。不幸な事故の一つや二つ起こってしかるべきだろう。

　しかも俺の職場は女性の方が多く、俺は身長も肩幅もそこそこある為。少し動くだけで良く当たる。

　ゴチン。

「痛っ！」

「あ、すいません！」

　思ったそばからこれだ。

恐らくだが、俺がトレーを持って上の台にあったドリンクを取ろうとし時にたまたま下の台においあるドリンクを取ろうとしゃがんでいた女性アルバイトの川谷さんが立ち上がり頭に俺の持っていたトレーがぶつかったのだろう。本当、すいません。

「良いよ～」

　と、そこで忙しさで力んでいた『ランナー』の空間に笑いが起こり空気が和む。まぁー悪くないかも。

「ジョウチャン。それ、やっとくからテーブル持ってきて」

「分りました」

　俺は、今持っている商品を神様に渡すと従業員が働くスペースを出て行く。そして、さっきまで神様に商品を受け渡していた場所の前にくる。そこにはいくつかの商品が置かれたトレーが並んでいた。

　テーブルとは『テーブルサービス』のことであり商品を頼んだ人のところまで持って行くことである。勿論、これもカウンターの仕事なのだが正直レシートに書いてある番号と同じ札を持っている神様に商品を渡すだけなので他の仕事よりたやすい。勿論、この業務にもスキルはいるが必要なスキルも商品を間違えないとか、笑顔と言葉遣いに気をつける、商品を落とさないとか、接客業の初歩の初歩のようなスキリばかり。

『ランナー』までするようになった俺にいまさら。

俺は、店内を見渡しトレーの上のレシートに書かれている数字と同じ番号札を持っている神様を探す。と、いたい……た……。カワイイ……というか綺麗。

　俺は一瞬、ほんの一瞬だけ足を止めた。

　俺は、このお仕事で何人もの神様を見てきた。金髪外国人に黒人外国人。今をトキメクＪＫにＪＤ。主婦。中には、少し露出が激しい服を着ている人もいたし、美人だと思う人もいた。ただ、俺はそんな人を見ても特に何も思わなかった。

それは心を殺し、神様の命令をけして聞き逃さないように、作り間違えないように、入れまちがえないように、この三つを常に頭に入れ続けてきたからだ。だから基本、どんな神様がこようと心の底では何も思わなかった。

けして、イチャイチャを見せつけるカップやいきなり怒鳴り込む中年や、言葉が通じない外黒人が来ても殺意などわかない。沸いたとしてもそれを表面上出さないだけの理性はあった。

なのに、それなのに！　まだ、何も一言も言葉を話してないのに、なんで俺は……こんなに感情がわきでてくるんだぁーー！！

いかん、俺。落ち着け。あくまで、自然に接客するんだ。この目の前の女性にもかかわらず黒いズボンを長い足により俺よりも着こなし、普通のカッターシャツじゃないおしゃれな白いシャツにネクタイ、髪をショートにした一見クールビューティーに見えるがいくら魅力的に見えようとこの気持ちを押し殺せ。

「お待たせしました。こちりゃ商品です」

　噛んだ、っていかん！　いつも通り。俺は笑顔を作り例の神様を見る。その顔は、間近で見ると分っているが綺麗だ。というか、よく見ると少しカワイイような、。特に目元が──って！　何思っとんじゃーワレェー！！　速く置こう。この神様に冷めた商品を食べて貰うわけにはいかない！

　俺は何故か震える手を必死に押さえ零さないようにテーブルに商品を置く。その時、ほのかに甘い匂いが俺の鼻腔をくすぐる。ヤバい、クラクラしてきた。俺は、すぐにその神様から一歩離れる。落ち着け俺！　速くいつもの、いつものフレーズを！　と、そこで俺は、視線を感じ自分の精神に毒だと分っていてもつい、その神様の顔を見てしまう。

　すると、俺とその人の視線が合った。あっやば

「ありがとうございます」

ズッキューン！

　そんな効果音がどこからとも無く聞こえる。同時に俺の意識は一瞬飛びかかった。

　そもそも、俺たちはあまり感謝の言葉をかけられることは無い。テーブルという業務は特にだ。大抵は、携帯をみたまま頭をただ下げたり、連れの神様との話しが夢中で何も無かったり、社交辞令での言葉だったり。

　故に、いきなり目を見て言われるとどう返せば良いのか分らなくなるのだ。しかも、空耳とかじゃなくてはっきり聞える声の大きさで……てか、ギャップ萌えーーーーー！！！

　やめて、そんなクールな感じ出しといて声良くて、礼儀正しいって何！　雰囲気とのギャップで可愛く見えるじゃねーかー！！

「い、いい、いえ。ご、ゆっくりどうじょ」

　俺は、そう言いいつも通り頭を下げるとすぐにその場を立ち去る。勿論、走りはしなかったが

「あった」

　アブね、なんで転びそうになってんだ。

「お帰りー、ありがとーってあれ？　ジョウチャン。なんで顔赤いの？」

「い、いえ。そうですか？　ハハハ何ででしょうねー」

　俺は、そう言い従業員スペースに入る。

　因みにその後商品を間違えたり、『テーブルサービス』をしにいくとつい目が一点に行ったりしたのは言うまでも無い。